

H29年度 研究・研修計画

1 研究テーマ「創時力」について

(1) 今、なぜ「『創時力』の育成」なのか

①北条教育

なぜ、「北条小教育」ではなく、「北条教育」と言われるのだろうか？

それは、本校が小学校だけでなく、家庭・地域、ひいてはもっと広い範囲を視野に入れた教育を地道に進めてきたからである。

昭和30年代以来本校は「たくましく現代に生きる子どもの育成」という学校教育目標を掲げ、その時代をとらえつつ、常に子どもを中心として社会の未来像を描いた上で教育を進めてきた。また、かつての生活教育の理念（＝子どもは、生活によってのみ育成される。学校や地域社会は、子どもの生活の場であり、仕事場である。したがって教育内容には子どもの現代社会から生活そのものを取り、その原則をもって、生きた内容構成をなさねばならない）において、「教科があって、教育があるのではなく、生活があって教育があるのだ。」と謳っているように、子どもの生活を重視した教育の在り方を模索してきた。

子どもの生活を重視した学習の一つとして統合学習がある。統合学習とは、人、自然、社会、文化との関わりの中で、子どもが自ら企画し、その実現のために体験や教科で得た知識・技能を生活の場で統合し、こだわりをもった追究や共感し合う一連の活動を重ねて、たくましく、より感性豊かに成長することをねらいとした学習である。このような学習を北条教育の核として進めてきた。

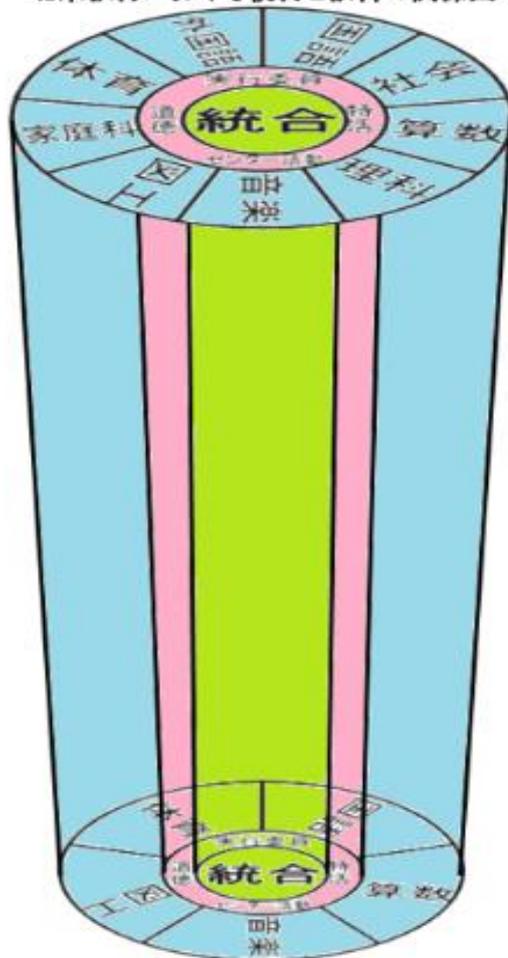
北条教育においては、現在も子ども一人一人の生活から湧き出た思いや願いを大切にされた教育を推進している。しかし、子どもを取り巻く様々な状況が、多様化してきてくるのは紛れもない事実である。そして、その渦中で生きている子どもたちが見せる様々な姿に今までの教育の成果を感じると共に、今後へ向けた課題を常に問い続け、研究し続ける教師集団がいる。

私たちは、常に子どもを取り巻く「現代」を見つめ直し、そして、そこでもとめられるべき「たくましさ」とは何かを追究してその時代に合った研究テーマを設定してきた。

②現代の子どもを取り巻く社会情勢

現代社会は文化・環境・政治という面において、数多くの問題であふれている。身近な地域に目を向けると、子どもの減少、学校の統廃合、限界集落など地方の再生等の問題。日本に目を向けると、子どもの貧困、原発などのエネルギー問題や集団的自衛権の問題。世界に目を向けると、トランプ大統領の就任やイギリスのEU離脱による世界各国の分断化など枚挙にいとまがない。

北条教育における統合と教科の関係図



インターネットの普及により、我々が知りたい情報は、瞬時に世界中から得ることができるようになった。またそれは同時に、ある地域で生まれた情報が、すぐに世界中に影響を与えられるようになったことも意味する。それは、大人だけの関心事ではない。子どもたちにも、世界を変えられるきっかけがあるということだ。逆の面からみるとそれは、現代の子どもたちの周りには望まずとも膨大な情報が常あふれている。そしてその情報は常に正しいものとは限らない。

さらに、家庭環境の複雑化や地域格差等に伴う経済面や文化面における子どもの貧困は、今後ますます二極化していくものと予想され、前述したような混沌とした社会を自分たちで生きていかなければならない。

そして、6年生が6年後、18歳になった時、選挙権をもち、自分の生活、未来を決断せざるを得ない社会状況になった。これは、遠い未来の話ではなく、近い将来、確実に迫りくることなのである。

③これからの未来にもとめられるたくましさ

上記のような「現代」において必要となる「たくましさ」とは何か。たくさんの情報だけに頼るのではなく、そこに本物をもとめ自分の目や自分の力で体験、経験してきたことからの実感の伴った理解をすること。何か壁にぶつかっても、あきらめずに何とか解決方法を考え出し、自分で行動が起こせること。つまり、「これからの未来を自分で切り拓くことができる力」こそ、本校の追究する「たくましさ」であると捉えた。

様々な問題が国際化、広域化、複雑化している社会においては、「違いを理解すること」「共通することを見いだすこと」「ひとつの考えに偏ることなくそれぞれをよく考え、ときには、調和のとれた解決方法を考え出すこと」が重要となってくる。そんなこれからの社会、未来において、特に必要になってくるものは「双極の窮究と調和」というスタンスをもつことである。それは、価値を一つに決めつけず、あらゆる可能性を検討し、最良のものを選択したり、新しい価値を創り出したりすることである。そのためには、それぞれの極「双極」を徹底的に「窮究」してよりよい選択、または創造していく「調和」を図ることが重要になる。

「双極の窮究と調和」を実践するための力が、近い未来には必要になってくることが想定される。そのためには、未来を自分で創っていくために必要な「たくましさ」の育成こそ必要であると考えた。

(2) 『創時力』の育成』とは

創時力とは、未来を自分で創っていく力

① 『創時力』の育成

本校の考える「たくましさ」とは、前述した通りである。そのたくましさを支えるのは、自分たちが生活、社会を創っていくのだという当事者意識である。「未来は変えることができる。」これを信じ、疑うことなく、実践を積み重ねていくことが北条の研究である。さらに、「自分の思い描く未来を実現したい」という願いや「壁にぶつかっても未来を切り拓いていこう」とする意志、その願いや意思を実現できる能力も必要である。このような未来を自分で創っていくために必要な意識・願い・意志・能力などをひとまとめにしたものを「創時力」と定義し、本校の研究主題を『創時力』の育成』とした。

なお、本校の研究は教科等における子どもの実態の改善・向上のための研究ではなく、その「創時力」を統合や様々な教科、学校生活全般の中で育成していくものである。

②目指す子ども像

創時力を身につけた子ども

「創時力」を身につけた子どもとは、未来を自分で創っていくことができる子どもである。未来を自分で創っていくということは、自分がどうなっていきたいのかという夢や、社会がどうなっていって欲しいのかという理想をもち、それを信じて実現しようとする事と考える。また、子どもたち自らが、

これから自分たちの生きる時代がどのように変わっていくかを想定し、そこで生き抜くことができ、想定できない出来事に遭ってもその状況の中でこれまで学んできたことを活かし、統合させて今の自分のできることを見つけ、実行していくことができることだと考える。

③「創時力」の核をなす力

前述のような子どもを育むために、私たちは特に、「創造的発想力」・「受容的批判的思考力」・「断行力」という3つの力をつけることが必要だと考えた。

創造的発想力

既習事項や生活経験、既成概念から心にわきあがった考えを統合させて、新たな考えを生み出す力。

受容的批判的思考力

様々な情報、考えや意見等を受容的立場や批判的立場で窮究し検討したり、ものごとを多面的・多角的にみることで物事の全体像を捉えたりする力。

断行力

実行には困難があろうとも、自分で決めたことを強い意志で実行する力・実現する力。

以上の3つの力を自分も他者も高め合う「生きたつながり」の中で育んでいく。

(3)『創時力』の育成を目指すプラン（カリキュラム）とは

①子どもが生きるプランであれ

子どもが学びに対して燃えるプラン

子ども一人一人の熱い思いや願いに支えられてこそ、創造的な活動は生み出される。どのような学習においても、積極的に取り組み、関わっていく姿勢を望みたい。これらの経験は、今後どのような状況においても自分らしく、前向きに生きていこうとする未来への当事者意識の育成につながる。

また、その学びが子どもにとって本物であればある程、子どもたちは本気になる。本物の学びの実現には、以下の条件があげられる。

- | | |
|----------------------|-------------------------|
| • 子どもが学ぶ必然性を感じる課題の設定 | • 生活場面や地域に根差した活動の重視 |
| • 生の体験の重視 | • 自己を表現する（主張する）伝える機会の確保 |
| • 多様な価値観が交流する場面の組織 | • 成員の共同によって新たな価値を見出せる |

これらの条件を満たす学習を、本校では「真正な学び」と呼び、教材や課題、学習活動の質を問題にする、あらゆる学習を工夫する際の前提条件とする。

子どもを取り巻く学びがつながるプラン

子どもの生活の中に教科という壁は存在しない。子どもを取り巻く学び（生活の中や教科学習で得た知識や技能）は、生活の中で統合され、さらに子どもの生活や未来へつながっていく。その「知識や技能が統合される場」を本校では「統合学習」と名付け、実践を重ねてきている。

子どもを取り巻く各教科・統合学習が、両者の学びをより充実させることにより、子どもがたくましく成長し、未来を創造していく力を育んでいくと考える。

統合学習では、教科学習で得た内容が統合され、生きて働く力となるためには、個々の子どもが必要感に迫られてわき出てくる思いや課題を重視した内容を取り上げる。統合学習において、自分の思いや願いをなし遂げた経験は、学ぶことに対する前向きな意欲だけでなく、課題を追究する際の明確な見通しや方法など、学習過程を自分らしくデザインすることができる力を育むと考える。

子どもがさまざまなコミュニティとつながるプラン

強固な集団は強い個によって形成される。「創時力を身につけた子ども」の育成には、まず一人ひとりの存在を確かにするのが大前提であるが、その過程において、他者とつながる活動を重要視していくことも大切である。他者とつながる活動を通して、新たな価値に気付いたり、互いの考えに深まりや高まりが出てきたり、充実した活動が創られたりする。さらに、教室という個性豊かな仲間との磨き合いによる学びに加え、より広い範囲にいる多くの人とつながることにより、学級内にはない価値観に触れることができる。その経験は今までにはない活動を創り上げるとともに、新たな自分、新たな仲間の良さを発見することにつながると思う。

そのために、個別学習と共同学習の調和を図ることが重要である。つまり、教科学習・統合学習それぞれにおいて共同学習だけでなく、個別学習を導入し、カリキュラムにバランスよく位置づけるのである。その際、子どものもつめを重視する立場と、教材の特質を考慮し、指導の意図を反映させる立場との両面から考えていく必要がある。

子どもたちと未来をつなぐプラン

未来につながる課題や問題を繰り返し考えることによって、自分なりの考えをもち、よりよい解決方法を探ろうという態度や未来への当事者意識を育てたい。そして、夢や理想を描くことによって目指す方向を定め、そこに向かって困難があっても未来を切り拓き、創り出すことができる子どもを育てていきたいと考える。

また、その過程で議論・話し合い活動の充実を図ることが重要である。2つの立場に分けた話し合いや多様な価値観がぶつかるような話し合い、合意形成を図る話し合いを仕組むことで、多面的・多角的な見方を獲得する。その力を育てることは、未来を創造していくために極めて重要な力であると思う。

②教師が生きるプランであれ

より「生かせるプラン」である

いくらプランを作ったとしてもそれらをもとに授業が構想され、実践されなければ意味がない。「プランはできあがった時点で既に古い物である。」と先輩方から教わったことを今でも覚えている。その感覚は今でも持ち続けているが、その意味が生かされてきたかどうかは疑問である。

プランは将来を見据えて、また、北条小学校としての明確な主張をもった上で作成されている。指導要領の改訂や教科書が変わることを考慮した上で作成を進めてきた経緯もあるが、今回のプランⅪは今まで以上に教師にとって使える、生かせるプランでなくてはならない。

そのためには、各教科・統合学習が目指すべき子ども像やプラン構成上の視点を含めた教科の構想を確立すると共に、それらを具現化できる手立てを提示する。また、それらを引き出す独自の教材や題材を位置づけ、即実践につながるような学習の過程を明示する。

あなたの香りのする実践が反映されるプランである

北条小学校では、指導の平準化に一定の力を注いできた。「いつでも」「だれでも」できる授業づくり、学校、学年、学級経営のシステム化をめざしてきた。それが実践をオープンに話し合える風潮を形作り、その風潮を背景に、カリキュラム管理室、統合学習、というような学校としての財産が生まれてきたのである。

これらのシステムを生かしながら検討、改善する必要がある。そしてそのためには、開発的实践が必要になる。もし、開発的实践が枯渇したなら、これは北条小の教育研究が止まるということになってしまう。そこで、あなたの香りのする、個性的な実践が望まれている。個を伸ばすことのできる個性的

な教師の実践が、やがて平準化されていくことを通して、全体のレベルアップへとつながっていく。突出した実践→平準化、この繰り返しによって、次のプランへと進んできたのである。

2 研究の進め方

私たちは「プランX I」にもとづいて、構想を練る。次に実践し、子どもの反応から評価をする。そして修正し、カリ管に納入する。このように、プランX Iの実践検証を進め、次年度以降の実践者に引き継いでいく必要がある。これがPLAN（計画）－DO（実践）－Check/Act（評価・改善）のプラン実践・検証サイクルである。

プランX I ⇒⇒⇒⇒⇒実践・検証⇒⇒⇒⇒⇒修正案 2カリ・デジカリへ

【読む → 指導案作り → 学年で実践 → 反省・修正案 → 2カリ・デジカリへ】

よりよい実践！ プランX I →プランX II へ

PLAN（計画）

- ①教材研究・・・個人&研究教科グループ・学年会
 - 教科構想の理解 ○単元の価値，系統性の理論背景の検討
 - 子どもの実態把握 ○主張の確立
- ②指導案作成・・・個人
 - プランX Iの単元構成の理解・指導案作成
 - ※プランX Iの完成をもって、すでにそれは修正の対象である。プランXを
実践検証する中で、新たな実践を生み出していく。
- ③指導案検討・・・研究教科G（主に教科の本質から） 学年会（主に発達段階から）

DO（実践）

修正，評価を充実させるため，学年全体で実践することが望ましい。その際，担当者が立てた指導案をもとにするが，クラスの実態に応じてアレンジする。

CHECK・ACT（評価・改善）

- ①参観と批評 参観は自由いつでもだれでも自由。参観したら必ず授業研究感想カードを残す。
- ②実践検討と記録 学年会，もしくは研究教科Gで反省をし，修正案を検討する。
- ③資料の納入 実践者は，資料と共にカリ管に納める。（デジカリにも）

授業研の進め方

- ・一人1実践の授業研究を行う。
- ・授業研は同じ研究教科グループ員と学年員（教担）は原則として参観し，協議会にも出席する。
- ・共通の参観授業や全体会を設け，研究・研修に対する共通理解を深める。
- ・協力員，講師を要請する。特に，共通参観授業については北条小を理解する立場の協力員だけではなく，参観者を想定した外部の人材を講師に招き，意見をもらう。

こうした取り組みをより円滑に，充実したものとするために，個々の分担や組織としてのバックアップが重要になる。そのシステムを以下に詳しく述べる。

教主（教科主任）は

研究教科グループのリーダーです。プランX Iの教科構想を意識した開発授業実践を推進する。研究教科グループや教科担当（教担）への積極的な助言を行う。そのためには、教科における自分の主張を明確に示す必要がある。過去の文献にあたり、教科をより深く追究している人のもとへ足を運んだり、先進的な取り組みを求めたりと前向きな姿勢が要求されるのは言うまでもない。そして最も重要なことは、そんな中から自分流を生み出すこと。それが結果として「北条流」と呼ばれることになる。

研究教科グループは

教主と共に教科の本質を探る仲間。教科における基礎・基本とは何か、そしてそれを発展させるものは何かといった理念の追究から指導法に至るまで、常に自分の型を追究していかなければならない。そして常に新しいプランについての検討を重ねて欲しいと思う。これからの動向をにらみ、開発の姿勢を常に持ち続ける。

教担（教科担任）は

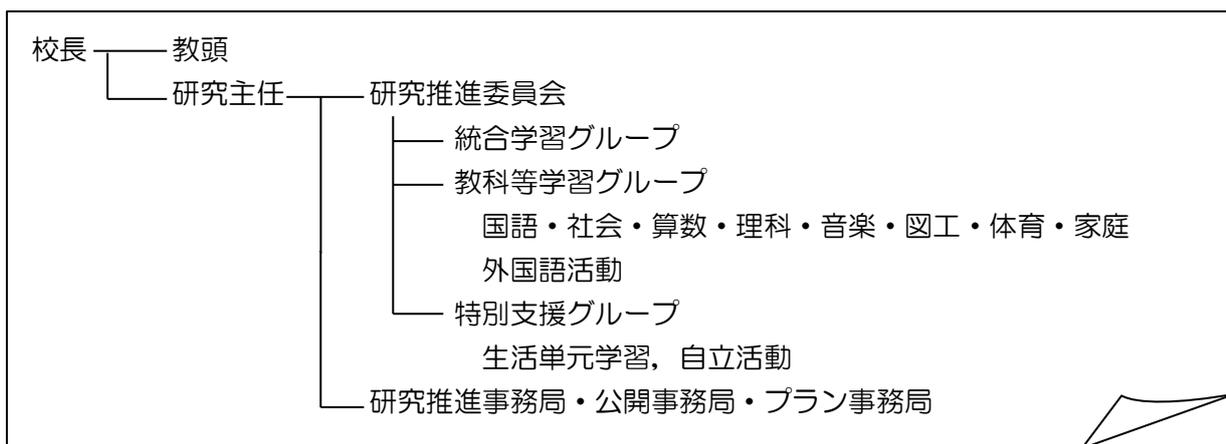
教主ほどとは言わないまでも、同様の努力は必要。その中でも特に実践に力点を置く必要がある。毎日の授業がプラン実践であるとの意識で学年のメンバーをリードし、実践と評価を行う。そのために学年会で指導計画の提案を積極的に行うことが重要。

学年会は

プラン実践にあたっては学年会の存在がとても重要。実践・検証を学年全体で行うことはカリキュラムの共有化＝カリ管創設のもとになった考え。学年会では指導案検討から修正まで、目の前の子どもに照らし合わせた最良の実践方法を求めるグループでありたい。日常的に授業を見せ合い、お互いに刺激し合い、助け合える仲間として学年会を考えたい。

そのため、学年主任はプラン実践検証の上でもリーダーシップの発揮を期待される。

3 研究組織



本校の目指す子どもは、「たくましく現代に生きる子ども」である。教育の場を学校から一歩外に踏み出したとき、教科書と教師だけでは教えられない世界がある。そのためには、学習内容において、生活に直接関わる内容を扱い、学習方法においては子ども主体の学習を構成していかななくてはならない。このような学習を通して、創時力をつけていきたい。